

第9回みどりの食料システム戦略本部 概要

1. 日時：令和4年8月31日（水）13:25～13:48
2. 場所：農林水産省 第1特別会議室
3. 出席者：野村農林水産大臣、野中農林水産副大臣、勝俣農林水産副大臣、角田農林水産大臣政務官、藤木農林水産大臣政務官、事務次官、農林水産審議官、官房長、総括審議官、総括審議官（新事業・食品産業）、技術総括審議官兼技術会議事務局長、大臣官房審議官（技術・環境）、危機管理・政策立案総括審議官、サイバーセキュリティ・情報化審議官、新事業・食品産業部長、統計部長、検査・監察部長、消費・安全局長、輸出・国際局長、農産局長、畜産局長、経営局長、農村振興局長、林野庁長官、水産庁長官、関東農政局長、報道官、政策課長、秘書課長、予算課長、広報評価課長、地方課長、環境バイオマス政策課長、みどりの食料システム戦略グループ長
4. 概要：冒頭野村大臣御挨拶後、川合技術総括審議官より、「みどりの食料システム戦略」の実現に向けた政策の推進について説明。次に、野中副大臣及び勝俣副大臣、角田政務官、藤木政務官、横山事務次官より御発言をいただき、最後に、野村大臣から締めくくりの御発言をいただいた（大臣開会御挨拶までカメラ撮りあり）。

【冒頭御挨拶】

（野村大臣）世界的に肥料価格が高騰している昨今、原料の大半を輸入に依存する我が国にとって、みどりの食料システム戦略に基づき、国産の堆肥に置き換える取組は、農林水産業における環境負荷の低減だけでなく、食料安全保障の確立にも資する、大変重要な取組である。

（持ち込まれた堆肥サンプルを指しつつ）私の目の前にあるものは、地元の鹿児島でお茶や小麦に使う今年の秋肥を堆肥から作っているもの。現物を見ていただこうと思って持ってきた。

肥料の原料は海外に委ねており、難しい状況になりつつあるが、鹿児島に限らず、畜産が盛んな地域には堆肥が存分にある。堆肥を使うことで、化成肥料を使用した場合と比べ、15～30%のコストダウンができると聞いている。農家の皆さんは肥料の高騰にも気を遣われているが、堆肥の活用はこうした状況にも寄与するものである。また、国内にある資源を有効活用するという観点からもこうした取組を進めてほしい。

みどりの食料システム戦略の話が初めて出てきたときに、当時の担当局長に対して、実際に取組が始まるまで何十年掛かるのかと率直に申し上げたが、早速鹿児島においても堆肥の活用の取組が進んでいる。今はアウトソーシングで行っている肥料の製造について、来年にはペレット工場を作りたいという要望もある。みどり戦略については当初実現ができるのか疑義があったが、実際に取組を進めている現場をみると、「これはやれるぞ」と思う。特にお茶については、堆肥の活用により輸出も十分可能になっていく。

「みどりの食料システム法」が本年7月に施行された。今後、法に基づく支援措置が本格的に始動していくことから、まさに今が、農林水産業のグリーン化を進める基盤を強固にしていくための大変重要な局面である。

就任当初、幹部の皆さんに対し、いよいよ日本の農業が変わっていく、変えていくターニングポイントになると申し上げた。先ほど省議の場で決定した来年度予算要求の内容も中心に据えながら、日本の農業が変わっていくため、変えていくために皆様方に御尽力いただきたい。

なお、本戦略について現場の認知が不十分であるとの声もいただく。今回の支援措置の活用も含め、地方自治体、関係団体や現場への丁寧な説明や意見交換など、現場主義を貫きながら、関係者の理解を得られるよう、農林水産省一丸となって取り組む所存である。

各局庁を越えて取り組んでいただき、副大臣、政務官にも是非御協力・御支援をお願いする。

(以上)